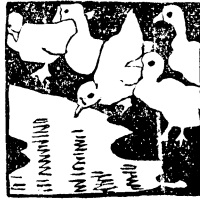


と正しからざる宗教に對するが故に一善と云ふ、一の對等的なることを意義あらしめ、國家をして佛國土たらしむることはなし得ない、吾人が其の目的事業に着實にして、遂に社會を堅實ならしむると否とは、全く之に飯嚙し此の信念に住すると否とに存する。

今此ニ娑婆世界ハ離ニ三災ニ出ニタルニ四劫ニ常住ニ淨土ナリ佛既ニ過去ニ不レ滅セ未來ニ不レ生セ所化以テ同躰也
とは法華經の信奉によりて、現實を直ちに理想境たらしめた聖祖の叫びではないか、と同時に一面に於て此の生佛一如淨穢不二の大理想の實現は、此の現實の人生を離れて成立せざることを示されたものと拜し得らるゝのである。

今や世は先づ現實と理想との調和ある、そして人生に飯着を與ふる法華經に基き、心底の宗教心を躍動せしめて、現在成佛の平和境に達し、及び未來永遠の一大生命を感受して、人類の使命を果すべく、直ちに信仰寸心を改めねばならぬ、これ無からんか現代は終に亡びるであらう。(終)

念佛思想史に對する余の管見



一 序 言

福 島 瑞 岳

歐洲戰爭後、總ての諸問題は、世界的と成つて來た。そして、平和の聲は、風の靡く様に傳へられて來た。突如として、提唱された、ウエルス氏の、世界國の建設論の如きは、實に其の顯著なるものであらう。然し其の平和の裏面には、何物か精神的に、根底を與へるものがある様に思はれた。

それは親鸞上人の思想であつた。そして親鸞上人の教義思想が最も遍照光明に時代的思潮に敵し、根本的に慰安を與へて宣傳されてゐるではないか。

然し自分は如何にしても腑に落ちない。それは宇宙大平和の實現は佛教の眞隨たる法華經主義即ち日蓮主義に依らなくてはならぬと信じたからである。

如説修行鈔に。天下萬民諸乘一佛乘となつて、妙法獨り、繁冒せん時の萬民一同に、南無妙法蓮華經と唱へ奉らば、吹く風を意を鳴らさず、雨つちくれを碎かず、世は義農の世となりて、今生には不詳の災難を拂ひて長生の術を得、人法共に不老不死の理顯れ時を各々御覽せよ、現世安穩の證文不可有疑者也。と斷せられた。此の現世安穩は、法華經の保證で、又不老不死も同様法華經の明文である。即ち、

藥王品に曰く。此の經は是閻浮提の人の病の藥なり若し人病あらんに是の經を聞く事を得ば、病即ち消滅して不老不死ならん。

と書かれてある、閻浮提は即ち世界中の人類の病の良藥である。然らば世界最大の平和的經典は、實に法華經であつて、日蓮主義でなくてはならぬ。

然し是れは井中の蛙の大海を知らないも同様の我田引水論だから、一往親鸞上人の思想を研究しなくてはならぬ。そしてそれを知るには歴史的根本思想に逆つて傳統的に其の經路を知らねばならぬ。

二 印度念佛思想の起因

印度に於ける念佛思想の起因は、何處から來てゐるか云ふと、近來或人の説に依ると發端は大乗經典からだ云ふ。勿論佛陀は、淨土三部經を説いて専ら稱名念佛に因つて安養淨土に往生する事を教へられたのであるから、佛説に起因してゐる事は當然である。然し阿彌陀經は、煩惱の爲めに苦しんでゐる一人の婦人をして、慰安を與へんが爲めに説かれたのだから、佛陀の全生命と云ふ事は出來ない、大乗佛教が、佛陀の眞髓とするならば、大乗教典そのものから云ふ事は出來ない。何んとなれば、淨土三部經は、一部分的

方便説であるからである。淨土宗の依經は、觀無量壽經、無量壽經、二卷、と阿彌經四卷との三部である。印度の龍樹菩薩、天親菩薩、支那の慧遠大師、曇鸞大師、導緯禪師、善導大師、日本の演信僧都、法然上人親鸞上人等は、皆此の淨土三部經に依つて、念佛思想史の系統をなしてゐるのである。

一、龍樹菩薩(佛滅後五百年)は、十住毘婆娑論を著作された。それは華嚴經の解釋の爲であつたと云ふ。そして佛教を大段二種として、一を自力の難行道とし、一を易行道とした。前者は人生の實修苦行の艱難なる事は急坂を歩行する様だと明し。後者は他力本願にて往生する事は、丁度一平海を船で、彼岸に達するが如きである。と示されてゐる。

二、天親菩薩(佛滅後七百年)は、北印度にて出誕された。往生論、淨土論、等の小乗の論部を澤山著作された。

「世尊我歸命盡十方無碍光如來願生安樂園」此菩薩自力の信仰を堂々と告白された。余今此の二菩薩の思想を考察して見るに此の二菩薩は純念佛思想家であるかを疑問せざるを得ない。

安國論新註曰、當如天親菩薩初依權教著唯識論立五性各無性不成佛義明十界皆成又、龍樹尊者ハ初宣十住等論ヲ終著智度論ヲ以テ判爾前法華優劣云云

此の意を以て考へて見ると、二菩薩の思想は、最初は、權教に依つて、彌陀念佛思想を主張されたが、後に其の非なる事に氣付き、實教に依つて、法華經の思想を取られたことは、事實である。

然らば、前者の龍樹、天親と、後者の、龍樹、天親と、其の人格、精神に於て、全々異ならざるを得ない内證の邊に約したならば、淨土眞宗の正系統とする事は出來ないと思ふのである。

三 支那念佛思想の系統

支那念佛の系統は、慧遠、曇鸞、善導等である。

三、慧遠大師は、道安に師事して、講説を受けた人である。廬山で、蓮華を池中に作つて、晝夜六時を定めて同信の僧俗と共に修行された、當代の名僧で、殊に十八賢と稱せられたのであつた。

四、曇鸞大師は、長命を欲して、五臺山に上りて、陶弘景に就いて、仙經の術を受け將に、歸らんとする途中善提流支に逢ふて、長生不死の法中仙經に勝れるものはないかと問ふた。流支の云ふのには「汝長生不死を望まんするならば、觀無量壽經を播けと授けた。大師は釋然と省悟して、淨土に歸した。天親の淨土論に依つて、願偈大意、起觀生信、觀行体相、淨入願心、善巧攝化、離菩提障、順菩提門、名義攝對、願事成就利行満足、の十科目を立て、縦横無盡に、巧に解釋して、頻りに淨土思想を宣傳されたのである。

五、道綽禪師は、北國の艸洲の人で、十四に出家し、涅槃經を講じたが、後瓊禪師に事へて禪を修して、大に、造詣が深かつた。一日石壁の玄忠寺に、曇鸞大師の碑文を觀て非常に感して、淨土門に歸した。安樂集二卷を著した、道綽の四修とて、念佛の行者の修すべき、四種修行を講じられた。一、長時修。二、無間修。三、恭敬修。四、無餘修、とて一心に淨土の業を修して、他に心を交へざる事である。然るに安樂集に、此の四修を明せる處はない。恐らくは隨代の善導大師の觀念法門に此の意があるから、道綽は、善導の誤れるのであらう。

六、善導大師は隨の人で道綽禪師を師として、淨土教を究めたのである。以前の、慧遠、曇鸞、道綽等は、盛んに、淨土思想を弘通されたが、教法の細領を組織的に、法門宣傳の、効果を與へたものではない。

然るに、善導大師は諸先哲の教義を、組織して、大成を遂げたのは、實に此の人である。永隆二年三月二十七日六十九歳で寂された。觀經疏、往生禮讚、法事讚、觀念法門、般丹讚、等である。眞宗では。七高祖中五祖として尊崇されてゐるのである。日本の法然上人の念佛思想は、支那三流中善導大師の思想を中心として繼承されたものである。

茲に注意を要するのは、佛陀が一代五十年の教説は、必ず前後を立て、そして權實淺深を、辯せられたのである。而るに、曇鸞、道綽、善導等は、諸師の權教に就いて、權を弘め、佛陀眞髓の、實教あるを知らないうで先教に依つて後教を捨て、原始佛教の根本思想を探らない不知恩の者と日蓮聖人は、嘆じられたのである。次に、日本佛教史上に於ける念佛思想觀を述べて見たいと思ふ。(未完)